光

第五十三輯

大正十五年五月

◆托鉢者と義務……西田天香
◆或る姉妹に送れる手紙……柳原舜祐
◆果樹園より……すゞき五ろう

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる浄財

◆武蔵野道場の歌（三）……野木典郎
◆薄日……松下吉衛
◆未明の先驅者（六）……水上鐵治郎
◆鹿ケ谷より……う・む生

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髄を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髄を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ徳を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、大度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとより言辭の擧し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尚自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絶し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

托鉢者と義務

西田天香

一燈園生活に伴ふ義務に就てお話しいたします。此生活は棄恩入無爲であります。こゝへ飛び込む時既に前の絆を切つて來ねばならぬのであります。三界に流轉纒縛した身に、なか〳〵恩愛は斷ち難いものですが、それすら切り通して、無爲の世界へと念願するものこそ、眞實の報恩者であります。

或る寺のお弟子が、こゝへ來て托鉢してゐられました。或る日、お師匠さんは、どうしてゐられますか、と私が尋ねますと、何とかしてゐられませうと、如何にも無造作に言つてゐますので、私はそれを咎めました。そんな、ぶつきらな言葉つかひを、お師匠樣にたいしては勿體ない、こうしてゐれば普通の御恩返しが、しにくいのですから尙更それを謝り、ふし拜む氣持でなければ、ほんとの棄恩入無爲ではない、と申しますと、ハツト心づかれました。

責任や義務を捨てゝ仕舞ふのではないのです。一層大きな責任を感じ、大きな義務を果さむとする爲の棄恩入無爲です。深くその心をみつめて、敬虔な懺悔がなければなりません。普通の生活では親を養ひ妻子を養ひ、幾人かの人を養ふものが、一燈園へ來ると、みんながそれ〴〵お光から養はれ、親を養ふことも、子を養ふ事もないのです、ただ自分の體のみを持つて、それすらお光に養はれて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

行くのです。もし病氣にでもなると、病院で大切にして見て貰へます。日日たれに小言を云はれるでなく、一面氣樂過ぎる程であります。もしこれをボンヤリして養はれてゐては、末恐ろしい贅澤な生活をして仕舞つた事になります。まして此頃のやうに、一燈園が世間から重く用ひられる時、尚と危い事が多いのです。ほんとの棄恩無爲に入り捨て切つた身なら、澤山な人を養ひ、大勢の人の煩悶を癒やす、大きな福田は捨身の程度に應じて表はれる筈です。こゝに至つて、はじめて、ほんとの親孝行であり、國家有爲の人であらうと思ひます。

棄恩入無爲の生活から、經濟上の義務をどう扱ふかに就て、私はかつて前の生涯の時、京都のある宿屋に一ヶ月の宿料百圓許りとお茶屋に七圓許り外に親戚にも少し借金がありました。先づ宿屋へ、どうぞお金のかはりに私の體を使つて頂きたいと、身を持つて行きました。宿屋では今迄に、澤山な仕拂ひもしてある事ですし別にそれ迄氣にもしてゐず、何かさせて貰はうとしても、なか／＼させません。それで毎朝三時頃から人の知らない間に、そこの表を掃きに參りました。權利も義務もお光りまかせで、そこから續いて丸山公園へも掃きに行きました。そのうちに、其宿屋では、とう／＼了解してくれて、托鉢をさせてくれました。

分厘までも償はねばならぬ、肉體だけは渡して仕舞つて仕末をつけ、義務を果してこねばなりません。私の義理の弟が秋田の鑛山で行き詰つたのですが、その時借金の所へ身を持つて行きました。金は返すやうに話は付いてゐたのですが、更に謝り、身を一番厭なところへ投げて行きました。そうしてゐるうち、そこで觸れた爺が、弟の不在中は、ひとつの野菜すらも弟の爲にお供をしてからでなけ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

れば自身に喰べなかつた程、その德を慕はれました。

此生活では對者を害するやうな事は出來ません。先輩の同人の或人が、前の生活の借金に就て、それはずつと以前に解決してゐる事なのですが、今度宣光社の仕事をするに就て、再び其關係の家に至り、此身で御用に立つ事なら、使ふて頂きたいと申出られました。身を渡し得る心をお光から惠まれたのです。世間の名譽といふものを思ふ時に、辛いものですが、死に切つた身には何でもない。もし先方に非難や不平や恨みがあるなら、どこまでも、それを消すまで懺悔をせねばなりません。宣光社で鑛山を預りました。宣光社の名義主は私であります。私は鑛山を預つて失敗したとは思ひませぬが、世間では失敗だつたやうに云はれてゐます。宣光社の任務上此まゝでは完了しないので、宣光社式にやつた仕事の義務に就て、私は背任罪を自首しました。その事は、「入牢の心を」に詳しく書いてあります。或る友人の辯護士に、懺悔の爲め入牢を望む氣持をのべて相談しましたが背任罪にはならぬといはれます。何よりもその懺悔の生活を續けて貰ふこそ誠に適當な行き方であるやうにおもはれると云はれ、懺悔の爲に入牢を望まれるなら既にあなたの生活のうちに入牢以上の罪ほろぼしの事實があるかもしれませぬといはれましたが、すまぬ、落ちつかぬ、それで一昨年は、入牢の心で病院に、一ケ月餘り、ヴイターミシの試驗臺に托鉢させて頂きました。娑婆に在つては、どんな人でも相應の義務はあるのです、最後の方法でおわびをせねばなりません。

御めい〳〵に、もしこゝへ來る迄に借金のあつた方は、反省して下さい。新生涯になつた、これでよいと思うてはなりません。借金のあるお家へも、また肉身の家へも托鉢者として身を持つて行かれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ますやう、親の内では托鉢が出來ぬ、など云ふのは、我まゝです、逃げてはならぬ。養はねばならぬ義務を捨てゝ來るやうに見えるには、更に深く養へるやうにとの禱りであります。或る場合は家族をも引受けねばなりません。一燈園へ呼ぶのではない、自分の路頭へ、手前の路頭へ預る程の確信のある人なら、一燈園でも引受けられる。扶養の義務ある人なら、新生涯の法にさへゐるなら養へます。今迄百圓許り月給があつて、四五人の家族を養ふてゐたものが、托鉢生活では養へぬといふ人もありますが、そう見えるかもしれませんが、何でもないのです。みんなが養はれます。養はれつゝいつかまたおのづと托鉢者の姿となつて、よりよき生活を樂しんで行つたやうな例もあります。前の生涯で養はれたよりも、總てが幸ひであり得ます。家族を扶養すべき義務あるものが、それをなし得ないで逃げて來るやうな人なら、到底意義ある托鉢生活はなし得ません。自分がハツキリするなら後より來るものも必ずはつきりします。借金に對し、或は扶養に對し、夫れ等の義務に就ては緊張して、夢寐にも忘れないやう、一人の親を養ふきりでなく、衆生の惱みを皆自分に負ふて立つ大覺悟がなければなりません。前の生涯の行き詰りは、間違つたところに向つて進むからであります。光の名によつて、義務を果す時、自利利他となります。懸命に托鉢する事が、義務を完全に盡す事であります。分厘までも償はざれば天國に入り難し、とキリストは云はれました。カイゼルのものはカイゼルに返せ、とそう思へばおのづから引きしまります。人の爲に身を渡し御用に立つならと、粉骨碎身、その表れは、やさしくなつて、人の面倒もねんごろに見る、小さな義務から開放されて、一切の義務を背負ふ、その禱りは、大悲心に感動する事であります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

前の生涯では、義務を感ずる事は苦しい事であつた、今の生涯では、法悦の感謝であります。また誰れにも心の借財といふやうなものがあります。人を憎む恨む疑ふ、そうして知らず知らず、人を傷けた事をも正直に償はねばなりません、すまないとの心からの懺悔は、謙遜な態度に表れます。救はれるものは、爭ふ時に、自分を出して謝まるものであります。

　こんな話があります、或るイカケ屋さんが終日出て働き隅田川を歸りかゝると向ふの家で、豪家の子息らしいのが遊興してゐる。イカケ屋さんは、それから強盗になりました。富豪の子息のだだら遊びが、誘引して強盗にして仕舞つたのです。知らず不用意な言葉にも、思はぬ波動を起して行くものです。今惡い事をする其人よりも先きに、自分の犯してゐる事を、祈りの深い人程自覺して行きます。これを懺悔の生活と云ひます。此生活を續けてゐますと、お光に觸れた、とでもいふやうな、手ごたへを感じます。するとそこからまた傲慢になります。入園の日が一番純であるかもしれません。入園して落ちつくと、そこからまた油斷も出る、托鉢してよろこばれると、直ぐあまへる。得意になつてゐるのは、すでに魔がさしてゐるのです。素直に進まれるが肝心です。孝行者といはれたある息子さんは、父の言葉に、ハイと下駄を穿き、母の言葉にハイと草履を穿いて歩いたと云ひます。かくする事がよいか惡いか別問題として、その我のないところ、道を學ぶ人のよきことわざと思ひます。

（大正十四年八月、一燈園に於ける天香師講話筆記）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

或る姉妹に送れる手紙

柳原舜祐

【一】

T様。御手紙有難うございました。先日差し上げましたつまらぬ手紙をそれほど喜んで下さいましたことを、本當に嬉しく感謝いたします。然し貴女の御手紙の中に、只一つ落ちつかない所がございました。それは、

色々思ひ悩むことがありますけれども、何れお目にかゝつてから申上げます

と書いて居られることなのです。勿論私共の家庭では、家内や子供等にいたるまで、よしやどんな理由に於てゞあらうと、貴女を迎へて、親しく談笑することが出來ますなら、どれほど深く喜ぶことかもわかりません。とは云ふもののさう云ふ私達の喜びのために、貴女の本當の精進を少しでも妨げることがあつてはならんと思ひます。右のやうな祈りのために、少し許り愚見を申上げることを御許し下さい。

骨肉の間ほど世に有難いものもありませんけれども、又是程、或る徹底した道に進まうとするものの、道心を鈍らすものもございません。されば昔の聖者達が、或は『親孝行のためにとて、念佛一度申

したること候はず』とも仰せられ或は『それわが來れるは、人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嫜より分たんためなり。人の仇は其の家の者なるべし』とも仰せられて居るのでせう。廣く深く且澄み切つた衆生愛に目醒めて、法界成就の大願のために、身を獻げて進まうとして居られる貴女に取りては、限りなき骨肉の恩愛の中に暖かに取圍まれて、朝夕を過されることが、勿體な過ぎることのやうにも思はれ、又德を減しつゝあることのやうに思はれて、可愛がらるれば可愛がられる程、大切にせらるれば大切にせらるゝ程、針の筵にあるやうな心持のすることかとも思ひます。

以上は骨肉の愛の麗はしく現れた方面に就いて申したのですが、一般の世間にある骨肉の間柄が悉くさうだと申す譯ではありません。私の寡聞の範圍内に於きましても、親自身の低い感情の滿足のために、子供の意義ある生活への進展を妨げて居る例は決して珍らしくありません。最も極端な例になると、或は子供の節操を賣り、或は子供の勞働を賣つて、親自身の不甲斐なさより生じたる生活の苦しみから逃れやうと心掛けるもの、更に進んでは親自身の放縱なる生活の資に供しやうと企てゝ居るものさへも無い譯ではございません。

所詮骨肉の間柄には、數多くの私的關係が、複雜に織り込まれて居りますために、若し人間の眞に進む可き道が、私を離れて公に奉ずると云ふことでありますならば、その大道を驀地に進まんとする者に取つての、難透難解の大難關が含まれて居る譯だと存じます。

然しそれが如何に難透難解の大難關であるにしても、苟くも私共が修養の道程に上らんがためには、何うしても是を破つて出なければなりませんが、扨て其の破り方は何うしたらよいのでせうか。

【二】

私は發心の道士を以て、生活の敗殘者とは目したくないのです。信仰の團體を以て我儘者の集團とは、考へたくないのです。道に進むと云ふことは、敗北に依る逃遁でも無く、增上我慢の亂舞でも無い筈だと存じます。然るに多い世間の例の中には、現に私の存じて居ります二三の例に見ましても、さう云つたやうな事實がありますので、私は特に此の點を注意したいのです。

實際社會の生活に於ける業務の苦しさ、規律の窮窟さに堪へ兼ねて、信仰の名に隱れて、放縱、無賴な生活を試みやうとするやうなことが、若しあつたなら、それこそ由々しき大事であると存じます。基督は、我世に勝てりと云はれ、孟子は、顧みて直からば、千萬人と雖も我行かんと申されましたが、苟くも信仰、又は信念の世界に立つものに取つては、さうした覺悟が欲しいやうに思ひます。

勿論本當に眞面目に自己を反省するものに取りては、反省することが深ければ深きほど、眞面目なれば眞面目なほど、無知無力が痛感せられ、その絕對的な無知無力の認識に伴ひて、神に對する絕對憑依の態度も生じて來ますので、其の意味に於いての無知無力の認識、謙遜卑下の精神は、素より必要なことだと存じますが、それと逃遁隱逸の氣持とは、全く別な立場にあるものと存じます。寧ろかうした謙遜卑下の精神ありてこそ、神に對する絕對憑依の態度生じ、その絕對憑依の態度によりてこそ無限絕大なる神の中に沒入融合することゝなり、自然只今申しましたやうな强い確信も生ずることかと存じます。

有知無知、有力無力の問題は別として、自分の我儘のために、親兄弟と仲好く暮して行くことの出

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

來ないものが、その我儘をその儘にして置いて、道の名に依りて生活して行かうとしたり、學校での勉强や、會社での務めが苦しいために、その苦しさの依りて生ずる處の怠惰心をそのまゝにして、佛門に這入らうとしたりすると云ふことは、甚だよくないことだと存じます。

『この故に汝もし供物を祭壇にさゝぐる時、そこにて兄弟に怨まるゝ事あるを思ひ出さば、供物を祭壇のまへに殘しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然る後來りて供物をさゝげよ』と馬太傳にはありますが、自分自身を供物として道に進まんとする者に取つても、當てはまる訓ではないかと存じます。

私は貴女が勤勞を厭ふて家出せられるものとの懸念は露ほども持ちませんが、骨肉の皆樣との關係に就いては、或は幾分先方を批判して自己を正しとする增上慢が殘つて居はしないだらうかと恐れます。其邊呉々も御反省、遺算なきことを期して頂きたいやうに存じます。

【三】

暮れ逝く春の夕などに、野原の果ての遠山の裾野が、一帶の煙嵐に包まれて、何處よりともなく這ひ寄る夕暗に誘はれながら、うと〱と眠つてでも行くかと思はれる有樣を御覽になつたことが有るでせう。私はさう云ふ景色が大變好きですが、かう云ふ景色に對した時の第一の憧憬は、遠い裾野の煙嵐の中に自分を運んで、陶然として羽化登仙したいと云ふことです。只今自分が踏んで立つて居る所の明るいはつきりした物の姿、明るくはつきりして居るが故に、色々の醜きものゝ眼につく所と、對照しては、一入霞にむせぶ彼方里のなつかしまれて參ります。

さり乍らその憧憬は、畢竟永久に憧憬に留るべきもので、離れて見てこそ、煙嵐は蒼然たれ、咫尺(しせき)の間に近寄つて、之を攫まんとすれば、それこそ文字通りの雲散霧消、遂に何物をも得ることは出來ないでせう。詮ずる所、煙嵐の麗しさは、油繪と同じことで、相當の距離を隔てゝのみ鑑賞せらるべきものです。私達が現實の世界にあつて、理想の世界を思ふ時、それは大變麗はしきものでありますけれども、愈辿りついた時に、本當に從前の期待を裏切らないものは恐らく極めて少ないことゝ存じます。從つて私共が、古い世界から新しい世界に移入する時に當りては、新しき世界が果して古きを捨てゝ求むる丈けの價値あるものであることを確認した場合か、それともたとひ何等の價値なしとするも斷じて後悔しないと云ふ堅い決心が出來た時かでなくてはならんと存じます。

若しも貴女がかの黃檗の出家のやうに、本當に純眞なる動機に促されて、新しい生涯に這入られますなれば、決してそれを一概に惡いとは申しませんが、男と違つて、御婦人の御身の上、出られるにしても、出られないにしても、御自分一生涯の身の振り方の何う云ふ徑路を辿る可きであるか、又辿りさうであるかと云ふことを考へ併せた上でのことにして頂きたいやうに思ひます。

【四】

先賢古聖の貴き生活のあとを仰ぎ見て、私達が先第一に學ばなければならんことは何でせうか。私はその方々の問題を取り扱はれた態度であると存じます。勿論これらの先賢古聖の示して居られる敎訓の內容にも無限の貴さが籠つて居るに相違ありません。然しさう云ふ一々の斯くすべし。斯くすべからずと云ふ箇條にも增して、私共に取りて有難きは、是等の箇條を示して下さつた處の動機乃至其

の態度であると存じます。

かくすれば　かくなるものと　知りながら　やむにやまれぬ　大和魂

とは吉田松陰先生が、泉岳寺下を過ぎるに際し、大石良雄氏の心事を詠まれたものだと聞いて居りますが、それは同時に自己の心中を吐露せられたものであると存じます。何と云ふ調子の高い言葉でせう。

全然外部から强制せられた行爲でなく、徹頭徹尾、自己内心のやむにやまれぬ根本要求に依りて、動くと云ふことは、あらゆる偉大なる人物の根本特徴を爲して居ることのやうに思はれます。人眞似をするのでなく、附和雷同するのでなく、一時の出來心で有頂天になるのでなく、其の行爲、其の言葉に對して、全責任を帶びて動くと云ふことは、まことに貴いことであると同時に、又むづかしいことであると思ひます。

むづかしい言葉を用ゐますならば、其の人の口を通して出る言葉の内容よりも、其の言葉を支持するために負ふことの出來る責任觀念の多少に依りて、人間の値打は定めらるゝ場合が多いと存じます。

主義ではなくして其の主義に對する態度と云ふことが、より貴いことであるやうに存じます。

【五】

以上長々とつまらぬことを申して參りましたが、貴女が私の處に訪ねて來て下さること、或はそれがために今一度家を出られるやうな結果になるかも知れないと云ふことを以て、必ずしも惡いこと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

とは申しませんが、その事を決めて下さる前に、

第一には、只今の貴女に我儘な點がありはしないかどうかを充分に考へていただきたいと存じます。出來得可くは骨肉の皆樣の充分なる御諒解を得られた上でにしていたゞきたいと存じます。

第二には、只今の貴女の家出の心持が、霞の在家(ありか)を尋ねるやうな、とりとめないものではないかと云ふことを充分考へて見て頂きたいのです。折角來ることは來て見たけれども、求めた霞は得られないで、却つてもと來し方に棚引いて見える、と云ふやうなことから、後悔せられることはないかを、充分考へて頂きたいと思ひます。

第三には、貴女の求道心が、本當に貴女自身の特殊の立場を、充分考慮に入れられた上での、やむにやまれぬ根本要求であるかどうかを、今一應吟味していただきたいと存じます。

右三つの事柄に對して本當にはつきりした考が定まりましたならば、其の時貴女は、發信の大導師として法界成就の大願のために、出家又は出世間の新生涯に這入られるか、それとも通常凡庸の人間として、在家又は在世間の生活を辿られるかと云ふ事が定まることでありませうし、それさえ確定いたしますなら、家庭の關門を如何に通過せらるゝかと云ふことも、自ら判然する譯では無からうかと存じます。大分長く書いたやうには思はれながらも、扨て讀み返して見ますとつまらぬ事柄許りを羅列して、必要な事柄をば數多く申殘したことを覺えます。來て下さることを決して厭ふ譯ではありませんで、家内や子供達は毎日のやうに御噂を致して居ります。只私の願といたしますのは、單に貴女を信仰に於ける勇敢なる女丈夫としてのみでなく、同時に柔和從順の孝子として御迎へ致したいのです。寒さも愈是から本物にならうと致して居ります。呉々も御大切に願ひます。まだ御目にはかゝりませんが皆樣に宜敷く御傳へ下さいませ。自宅一同よりも山々宜敷くと申してをります。

果樹園より

すゞき五ろう

春

　この頃は
梨の花を　間引いたり
桃の虫をとり
葡萄の薬かけ
草けづり、
仕事の合間（あひま）の　お休みには
青草の上に　臥ころんで
トルストイの
「光あるうちに　光の中に歩め」を
讀んでいます。

　この様にして
自分一人は　をぼつかなくも
黎明の　光の中を歩みながら
光明遍照十方世界
たゞ　それのみを
祈る心です。

夏

　梨畑の　薬かけをしていた人々は
小川で　手を洗つて
綠の波を　打つている
葡萄棚の下を
大股に　ゆつたりと歩きながら
各々の小屋に　歸つて行く。
　大人の群を走り抜けた　男の兒が
納屋の方え向つて
「晝やで——」と
叫びながら　飛んで行く。
　納屋の中から
四五人の　子供達が
キャア　キャアと　歡呼の聲を

擧げながら　走り出した、
裸足の兒は　輕く
大きな下駄を　はいた兒は
勢一杯の　努力をして——
のしのしと　歩いて行く
親の後を　追つて
大きな手の内に
小さな手が
吸いつく樣に　からみ着く。
　主家(おもや)の方から
晝食(ひる)の知らせの板木が
パンパン、、、と　響いてきた。
　紺碧に　冴えた
眞夏の空の下で
萬物は　祝福の微笑(ほゝえみ)を
交してる。

秋

　背負籠(しよいかご)の中に
入れられた
鼻垂し小僧、
それを　負うた母親の
勞苦に耐えた
敬虔な姿、
あゝ、山の木々は
秋の新芽に　燃え立ち
田甫は　黄色く輝いて
苅り入れを待つ、
十月の自然は
光の中の巨人の樣に
大手を擴げて
私を迎えてゐる。

冬

大石　小石、
鶴嘴　かつちり
火花が　出ろよ、
洋梨畑(ようなしはたけ)の
石掘り仕事、
うんさこ　すつさこ
命も　掘り出せ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

武藏野道場の歌（三）

野木典郎

冬に入るころ

富士の山に雪いちぢろく降りければ足柄山に淡雪降れり

斑駒のはだらにみ雪降りおきて雲井さ分くる秩父山脈

ふるさとの遠きを思ふ頃にして秩父は悲しみ雪かかぶり

うつそ身に寒きみ冬は近からし遠き高嶺に雪降る見れば

夜べ雨に濡れ透りたる國土の綠り衰へて冬は來向ふ

數ケ月の前まで我が病みし東京市療養所に托鉢し丘に
のぼり木を伐ることあり

うつし身の命を惜みこの丘にあわれ消ぬがに二年經つる

山かげの赤土道に霜立てり此所に歎きてゆきもとほりき

冬山の松の青葉にひそみ居て鳴く小雀の聲のかなしさ

影寒き木立ちに入りて人知れず嚙みし松葉を吐きて捨てしか

山の上の光り寒けき小松原松かさひらきて匂ひけるかな

時雨

降り過ぐる時雨に濡れし櫟葉の枯色寂し空は晴れつゝ

あかつき

板の間を踏む、音すら響く寒さには拍子木くやしく飛び起きるなり

しらじらとあした月夜はうつろひぬ足赤らみて土間流し居り

汲み水の氷を割りて衣すゝぐ托鉢に行くその時の間を

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ますがしき冬の旦(あした)に起き出でて心のうちに悔ゆるものなし

しづけくも富士の山傍(び)に居る雲のい行きさやかに見へ初めにけり

軒端より降りおける霜は枯原の遠退(の)く丘にまさやけくして

白霜に朝の光はしみにけむそこはかさなく靄の漂ふ

自愍

たのまれて煙突掃除によごれ居る己(おのれ)の性(さが)を下思ふなり

玻璃窓のふけども塵の清まらぬ心の悔いを常持ちにけり

愚(おろか)さはもの言ふ口をつつしみて頼まれて事をするの他(ほか)はなし

働きて腹の空(すく)てふ安けさを日の暮るゝ頃思ひ居たりし

我が心さだまり難し土深くひそむ流れを思ひわびつゝ

あめつちにわれをいとほしかなしみのたまゆらすぎてあわあわしけれ

○本號表紙題字　福島縣伊達郡靈山村大字大石、靈山寺門前の供養塔（後醍醐天皇の元徳三年、今より五百九十六年前のもの）の、光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨のうちよりいたゞきました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

薄日

松下吉衛

夜汽車のなかわ、そう大してこみあつてわいなかつたが、のりすごすのが氣ずかわれて、敬一にわ、おち／＼眠られなかつた。北國から出て來て旅ずかれがしているのもかまわず、夜半ちかい發車なのに、わざ／＼T驛まで見送つてくれた同人のHやSの友情お、またなくなつかしみなごしながら、うと／＼しているうちに、汽車わ、いつかもう、E驛についた。

彼わ、いつも持ちなれている學生などがよくつかうズックの手さげカバン一つお、無雜作に小わきにかゝえて、プラットホームにおりたつた。外わまだ曉ともおぼえぬ暗さだつた。彼のほかに二三下車した客があつたようであるが、ずん／＼ブリッジを渡つてあつちへ消えていつてしまつた。ひとりぼつちの彼のすがたが、やがて、驛前にあらわれたが、こゝわ、彼にわ、初めての土地なので、目ざすOとゆう所わ、どこおどう行つてよいか、そちこち見まわしても、敎えられてきたゞけでわ、皆目、道すじのあてさえつかなかつた。驛夫にたずねようにも、もうひつこんでしまつていて、待合室にも改札口あたりにも、誰一人いなかつた。

ふと、支那そばやの車が、がら／＼、こつちえやつてくるのが見えた。夜あかししたせいか、空腹

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

もおぼえていたので、敬一わ、それが驛前えとまると、ずか〳〵近よつて行つた。

『おはよう、そばやさん。おできになりますか。』

『おはようござんす、えゝ、できますとも。』

『でわ、一つどうぞ。』

彼わたべながら、○えの道をくわしくたずねた。それわ、そばやの説明でわ、道おぼえの極端にわるい彼にわ、途中でなお少くとも三四度わたずねなおさなければ、とてもわかりつこないほど、こみいつた道であつた。

『船でわたれば、わけわないんですが、まだ三四時間もしなければ、出わしますまいから、まあ、そうしてずうつとまわつて行くのですね。そう、二里もないでしようが、二里と思えば大丈夫でさあ。』

驛前から左の方え少し行つて踏切お越すと、長くつずいた狹い道幅の港町があつた。町わまだ疲れた眠からさめようともしていなかつた。道幅がやつと自動車お通すほどの狹さなので、店々の街燈が、町おわりあいに明るく見せていた。しかし、人つ子ひとり通らなかつた。時々、はるか遠方にきこえる鷄の聲のほか、何ひとつこの靜寂をみだそうとするものがないなかお、敬一わ、無帽の五分刈頭に、東京とわちがつて、三月とおぼえぬ温味おもつた曉風のすが〳〵しさお感じながら、彼自身の足音おもはゞかるものゝように、こうした時、彼のよくするごちらかといえば内股な小刻みな歩み方おして、たゞ、まつすぐに、どこまでも〳〵かまわずに歩いた。もし、誰か見ているものがあれば、歩

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

くことそのものお目的としているかに考えられたろうほどに、彼わ一ずにまた無心に歩いた。一軒、早起きの老婆が、偶然にも、雨戸おあけて表をのぞいているのにあわなかつたとしたら、彼わさんでもない所にまで迷いこんで行つたかもしれなかつた。老婆に敎えられて、短くない距離お引きかえしながら、——こうしたことわ彼にわめずらしくない例である——彼わ自分の生活の進路もこうでわないかなど、ふと思いうかべて微苦笑された。

道わ、町お出抜けると、入江の岸に沿うてあつた。橋おわたり、入江の向う岸に出て左の方に折れて少し行くと、そこわもうM半島であつた。『半分道わきたろうか。』敬一わ、こう思いながら、腕時計お見たら、時針わ丁度五時のところを指していた。夜わとうに明けはなれていたのであるが、彼わ、この時はじめてそれに氣がついた。彼わいくらか歩調お早めた。行く〳〵道の兩側の畑にわ、五六寸にものびたサヤエンドウの作られてあるのが、敬一の目おひいた。こんなにも時候がちがうものかと、彼わ意想外に感じた。

サヤエンドウわ、彼に幼時に於ける故里の生家の食卓についての記憶お呼びさました。——サヤエンドウの特別すきだつた彼わ、それが、彼の生れた町の近在の農家のかみさん達によつて脊負い籠に荷なわれて賣りにこられると、一升その時分で十何錢もする出はじめから、よく母にせがんで買つてもらい、朝わ味噌汁の實にいれ、晝わ油揚など〻一緒にあま鹽に煮たりして、夜もその殘りお食べるとゆうふうであつた。『よく、まあ、そんなにあきずに食べられたものだね。』と、母わ、よく、笑いながら云い〳〵した。その母の姿おなつかしみながらも、なくなしてから、もう、かれこれ十年になる

と、考え及んだとき、彼の心にわちよつと暗い影がさした。…………
半島えはいつてからも、道おぼえのよくない彼わ、目ざす『綠の家』えたどりつくまでにわ、なお二三度たづねゝばならなかつた。
『綠の家』わ、〇〇の本街道から東の方に切れている小路から更に二十間あまりもひつこんで、畑の中に建てられてあつた。鷄舍が二棟、たてにならんだ後の方七八間はなれた向つて右寄りのところに、住居にあてられてあるらしいクレオソート塗りのさゝやかな洋式の小舍があり、そのまた後わ、すぐ松林になつていた。
敬一が小路からはいつて、鷄舍ちかくまで進んだ頃、鷄の餌のバケツおさげた若者が、ひよつこり鷄舍の陰からあらわれた。若者わ敬一のまとつていた盲縞の筒袖に目おつけて、自分の供えるこゝの主人の屬してゐる敎團の人であることお、早くも氣ずいたらしく、につこり笑つて默禮したまゝ、奥えかけこんで行つた。待つ間もなく、主人わ若者と共に、敬一の前にやつてきた。二人が最初の挨拶おかわしたのは、ほとんど同時であつた。
『よく來てくれましたね』
『あがろう〳〵と思いながら、毎日のことにおわれているものですから、ついごぶさたしてしまいました。……此度、實わ、急にKまで行かなければならぬ用事が出來たものですから、お立寄りすることにしたのです。』
『そうでしたか。どうぞ、出來るだけゆつくりしていつてください。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

『ありがとう。正午までにわ、しかし、立たせていたゞきませんと、Kの方の用事の間にあわないのでして……』

『いつも、ほんとに、忙しいんですね。無理にお引きとめしても、なんですけれど、それでわ、こおつと、どうしましようかしら。』

『御用おなさりながら、お話してくださつたら。』

『じあ、どうぞそうゆうことに。』

こういつて、主人わ敬一お案内して鶏舍につくりかけになつている餌小屋にはいつていつた。そこにわ、魚のあらお煮る大釜や、こ米•ぬか•ふすま•貝殼など鶏の食糧品のはいつた箱や袋が秩序よくならべられてあつた。一緒についてきた若者に、何か用事おたのむと、主人わ、つい先刻まで仕事おしていたらしい席について、ひよこにでもくれるのか、青菜お細くきざみはじめた。

『こゝわ、もう少しで創業滿二年になりますよ。初め半年ぐらいわ、それわ、苦心でした。』主人わこう語り出した。

『六千圓だしてもらう豫算で、もくろんでいたところが、いよ〳〵着手する段になつて、三千圓しか出來ないと後援者からゆうてこられた時にわ、まいりました。そこで、急に設計お變更して、この二棟の鶏舍お、ともかくも、こしらへて、養鶏にわ丸つきり經驗がないので、鶏と一所に生活し鶏のことお先ずよおく知らなければならないと考えて、今御案内しますが、鶏舍の片隅四坪ほどのところに床お張つて、家内と子供二人と、それからさつきの若者と五人して住つたのです。

『鷄と一所に住つたのがよかつたようでした。鷄にあの狹いかこいの中で安住してもらうのにわどうしたらよいか、鷄に親しみ鷄に仕えたら、それがおのずと會得されました。おかしいのですよ、新米の私に、此頃でわ、そちこちから鷄のことおいろ〳〵きゝにまいります。産卵率がよそと比較すると不思議なくらいいゝんでして、この冬など寒中ですら六十パーセント以上も産みましたもの。……あゝ、ようやく、ひよこの餌が出來ました。どうぞこちらえ。』

敬一わ主人に從つて立ちあがつた。二棟の鷄舍の中の後の方のゝ五坪ほどの一區劃が、ひよこの飼育所になつていた。そこにわ、かえつて十日目くらいなひよこが、三百羽以上も、主人獨特の考案に成つたとゆう保温器のまわりによりかたまつて、ピイ〳〵ないていた。主人わ餌おもつて中えはいる前に、入口のところで、足や手に噴霧器で消毒液おかけた。

『ずいぶん用意周到なんですね。』

『えゝ、こうしないと、どうも寄生虫がわいたりして、おちるものが出來がちです。これわ、かえつて一週間ですがね、おちたのわ、わずか、數羽しかありません。』

『一週間にしちや、大きいですね。種類わ何ですか。』

『米國から呼んだ純粋ものです。ハリウドの有名な養鷄所のホワイトレグホーン種ですが、ハリウドとこゝと、風土の具合が大へん似ているので、きつとよからうと思います。』

以前、T縣の田舍のある養鷄所に奉仕したことがあり、多少わ鷄についての知識おもたないでもなかつた敬一わ、主人のこの答に、興味をそゝられてか、ひよこおもう一度見なおした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

主人わ、こうして對話しながらも、餌のいれものにバケツから彼が七八種もまぜて丹念にこしらえた餌おうつしたり、保温器の加減お見たりしていたが、やがて、入口えもごつてくると、すぐ左隣の一劃しきられた、ずつと大きいひよこの入れてある四坪ほどのところを指さして、

『こゝが、つい、最近まで、私達の住居になつていたのです。家内わ去年の夏こゝで三番目の子のお産おしたのですが、前にくらべると、奇蹟と思われるくらい安産でして、家内もたまげています。生活がかわつたおかげなのでしよう。……おなかゞ痛むつてゆうものですから、私が釜の下にたきつける、民造さん——あの若者です、あの人に産婆さんお迎えにいつてもらうして、産婆さんが來るか來ないかに、もう産れてしまつているのですからね。おかいこぐるみで遊食していた時分とわ、腹の力がよほどちがつて來たものと見えます。こんなわけで、今わ、もう、家内も、すつかり落着いていてくれますが、最初しばらくわ、何しろ生活が枯淡きわまつていて、時にわ自作のさつまいもだけで間に合わせた日すらあつたほどですから、家内もまいつてしまつたのでしよう、とう／＼暇おくれといゝ出されたにわ、私も全くよわりました。……じいつと祈りまして、私の行き方としてお、ごうにもこうにも、この生活のしかたしかないと信ぜられたものですから、自分の不都合なところわ悉皆おわびして、ごうなり考えとおりにしてくれるよう、家内に申しました。今、住居になつているバラックの裏手の松原で「こゝわ道を求める者だけのおいてもらえるところにしたいと思う。情においてわ、ほんとうに、忍びないけれども、あなたおこのまゝ引きとめることは許されない。しかし、一つになつて、ごんなに苦労しても生活おほんとうのものにしたいとゆ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

う願がおきたら、いつでも歸つてきてもらいたい。」といつて別れたのでした。子供も一所につれて行くとゆうから、ゆうまゝにまかせました。家内わ、それから、何でもS市の宿屋で一晩考えあかしたのですつて。翌朝もごつてきてわびてくれました。それからわ、家内の生活が丸つきりかわりました。家内にとつてわ、あの時がほんとうの發心だつたのでしよう。KのI園に御厄介になつていた時分のは、私がはいつたから、やむお得ず、ついて行つたとゆうにすぎなかつたのですから。』

こう話されると、敬一わ、何年か前、まだ彼がKにおつて親しくNさんの導きお受けていた時分、その頃ある物持のさゝやかな離れ座敷に假寓していたNさんのところで、はからずも出くわした涙ぐましい光景お、まざ／＼と想ひ浮べずにいられなかつた。

敬一わ、その日、朝からNさんのところえ出かけて「祈りのかたち」についていろ／＼ねりあつていた。そこえ訪ねてみえたのが、二人の子供をつれた中年の夫婦ものであつた。

『はあ、いらつしあいましたか、いつおつきでした。』と、顔おあわせるなり、Nさんわなれ／＼しく言葉おかけた。

『昨晩そおくでした。』

『まあ、どうぞおあがり。』

敬一わ、こうした場合、いつも誰にでもするように、座蒲團お敷いたり茶おすゝめたりして、いん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ぎんにもてなした。男わ口ひげお短くかり、目なざしの涼しい、鼻の形のすぐれてとゝのつた壯年者で、セルの袴をつけていた。婦人は四つかそこらの大きい方の子供の手お引き、小さい方のまだ乳ばなれしないらしい子供おせおつていた。せおいばんてんの、何かやわらかもので氣のきいた縞柄であるのが、こうゆうものに鈍感きわまる敬一にも、なぜか特別な印象お與えた。婦人の樣子のどこか憂わしげなのにも、こうした家庭ぐるみの入園希望者によくある、どうにも避けがたい精神上の葛籐のあとが讀まれ、敬一わ、自分の身にもつまされて、直接ことばもかわさないうちから、胸にこみあげてくるかたまりお感じた。

Nさんと來訪者との問答で、その人となりがあらまし敬一にもわかつた。

來訪者わ玉木卓郎といつて、有名な地質學の大家お父とした、彼自身また天才肌の人で、北海道、九州、臺灣、朝鮮と各地で企業家として種々な事業ごとにかゝわつてきたのであるが、最近、朝鮮での電氣事業に從事中に、總督府の招ぎを受けて全道お巡回講演して歩いていたNさんに、ふとした機會から會うことゝなり、何事にも鋭い洞察力おもつた彼わ、一時間ばかりたゞ一度會談しただけで、直ちにNさんの提唱する新生活の根本義お悟得したものと見えて、友人先輩の忠言にも一切耳おかさず、それ〴〵仕事の方の始末おつけて、ふりもぎるようにして、一家おあげてNさんの率ゆる教團にはいる決心で、Kえやつてきたのであつた。

玉木一家わ、Nさんお訪れたその日からH山の麓にある教團の道場で起居することになつた。『學貧道場』と呼ばれているそこでの生活わ、彼等に決して無難でわなかつた。T女學校の出身とゆう芳

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

子夫人の、性來あまり壯健でない體質が、朝わ湯漬、晝も夜も麥七分米三分とゆうばらばらめしに、おかずといつてわ、Kで一流の篤信なそばやからいつも供養される習わしになつている昆布のだしからの鹽煮や、ひね澤庵程度のものしかない枯淡きわまるくらし方に、適應しかねたせいか、しばらくの間に、はたの見る目もいたいたしいほど榮養お害して、乳もさつぱり出ないやうになり、これにわ、主人の玉木も、さすがに少なからず困惑せざるを得なかつた。當時、KおはなれてTの方にきていた敬一の耳にも、この樣子わほのかにひゞいた。

獨り行く出家沙門の姿よりわ、家族ぐるみの在家俗諦の形おとつての修行に、彼の屬する敎團の特殊な使命があると信じている敬一わ、男にしても女にしても若い獨りものが大部分おしめている同人の中に、玉木一家の加わつてきたことに、なみならぬ期待をかけていたゞけそれだけ、このかんばしくない消息にひどく胸を痛めた。

大きい方の子が、またつずいて肋膜炎お病むにいたつて、きかぬ氣の玉木も、人情にかてなかつたのか、敎團の福田お私することに對する過ぎたる遠慮からか、おそらくわその兩方で、とうとう妻子おその實家にかへしてしまつた。玉木わ、理論わともかくとして、夫わ夫、妻わ妻、子わ子とゆうように、求められるまゝに、甲の家、乙の宅えと轉々仕えていくかたちにのみよる修行でわ、自分のように德を積んでいないものが、家族ぐるみ妻子もろともに歩む道としてわ、實際上、行きすまる場合のまゝあるとゆう結論お承認しないわけにいかなかつた。

玉木の道場生活わ、尙二年あまりつずけられたが、その間も、敎團の行き方が、一時の修行か生涯

の生活かとゆう疑問わ、始終、彼の念頭からさらなかつた。思いあぐんでわ、Nさんにはかつたことが一再でなかつたけれど、彼にわ、どうゆうものか、この問題にかぎつて、心の底からうなずかれる段まで行き得なかつたので、妥協とゆうことお悪徳の第一位においている彼わ、今更、前の生涯にも歸れず、そうかといつて、何日までも妻子おその實家に託したまゝで自分ひとり澄んだ生活にひたる無責任おつずけるわけにもいかず、悩みに悩んで、とう〳〵一週間もねこんでしまつた。當時、道場の世話役をつとめていた一人が、こうした悩みのあるのお知つてか知らないでか、假病おつかつてゞもいるかに陰口おきいたのが、彼の耳にはいつた時、あまりの情なさに、彼わ男泣きに泣いたとゆう。

『I園の今の歩み方わ、一人行く道だと思う。そこに渡されてある獨木橋わ、子供お負い妻の手お引いて通るにわ、私のような足並のしつかりしていないものにとつて、あまりにあぶなすぎる。I園生活の根本精神そのものわ、この上なく尊いものであり、それに氣ずかせてくださつたNさんの御恩わ、終生、私の忘れることの出來ないところであるが、すべての事情お熟考した結果、私わ敎團からはなれるより外ないと覺悟した。………』

玉木から、こうした消息がTにいた敬一にとゞいた時、敬一わ、同人たれかれが結婚したあと、敎團と、どうしてだか、日に〳〵うとましくなつて行く事情などお思い合せ、また自分の身にもつまされて、いゝようもなく寂しい氣分におそはれた。

玉木わ、かくて、KのI園から出てしまつた。その後久しく敬一と玉木との間に音信わたえてい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

た。ところが、思いがけなく、一年ぶりかに、敬一わ、Tから五時間たらずで行かれるM半島から、そこにもう仕事と生活とお惠まれた旨、簡單に報じてある玉木のはがきおもらつた。敬一わ、すぐにも訪れようと思つたが、當時京濱の震災救護事業に沒頭しきつていて一日もあけられない際だつたので、とう〳〵今までその機會が與えられずにすぎたのである。

『まあ、よくいらしつてくださいました。ごはんの仕度おしていましたので、つい失禮いたしました。どうぞこちらえ。』

玉木と敬一とが鷄舍から出て、尙も語りつずけながら、住居の方に行こうとしていたところえ、夫人の芳子が、乳呑子を脊負い、上の二人の子供も一所に、小走りに走つて來て、こう挨拶した。

『大へんごぶさたいたしました。皆さんお丈夫で……ずいぶん、いゝところですね。』

『ありがとうございます。子供等わ朝から晩までたんぼで遊べるものですから、體にわよほど具合がよろしいようです。さあ、どうぞおはいりくださいまして。』

招せられるまゝに、敬一わ中えはいつた。住居とわいつても、十疊ほど敷かるところが土間から一尺五寸ぐらいの高さに板ばりになつていて、籐か何かであんだ敷物がしきつめてあり、西側についている入口おはいつたところから、ずうつと南側にかけて、幅三尺の土間になつている一間だけで、東南の隅に帳簿だてのついた事務机が据えてあり、それの向つて左わきに光明壇がかざられ、西北の片隅がまた臺所にあてられているとゆう始末、玉木夫妻子供五人に加えて一人の若者とそれから先頃知友

から託されたとゆう病弱の一婦人と合計七人のものが、起臥する場所としてわ、誰からも咎められる氣ずかいのないもので、火鉢もテーブルもその他數うるに足らぬ家具も、すべて、あるはずの所にあるはずの物がおかれてあり、簡素わもとより簡素であるが、それなりにすつかり調えきつているとゆう感じお敬一に與うるものがあつた。窓わ東と南の二方に切られ、南の方のからわ、鷄舍が見えるようになつており、東の方のからわ、麥畑お前景として松原お距てゝ富士山が眞正面に眺められた。更に敬一を喜ばせた一事わ、この部屋の天井板が丈夫に張られてあつて、屋根裏まで使われるようになつており、遺憾なきまでに空間の利用がはかられていることであつた。

『では、おつとめして御飯おいたゞきましよう。』

玉木わ、こういつて、ルパシカ型の上衣の上に、僧侶の用いる頸からかけて胸えたらす袋のような格好の頭陀袋とかゆうのお着けて光明壇の前に端坐した。敬一がつずいて坐ると、ほかのものもこれにならつた。光明壇の向つて正面の位牌がおいてある上のところにNさんの寫眞のかざられてあるのが、敬一の目お特別にひいた。『教團の誰彼から叛逆者あつかえにされている玉木さんが、こうして朝な朝なNさんに向つて禮拜の誠おさゝげているとわ、Nさん自身も或わ御存知ないかも知れぬ。誰がI園生活のほんとうの信奉者であるか：……』敬一わ瞑目靜坐しながら、考えるともなくこんなことお考えた。

道場での習わしどおり、懺悔文から始めて、般若心經、壽量偈、山上の垂訓、修證義、光明祈願と讀みすゝんで、四弘誓願、回向文で結び、木魚の音も無理にたゝいて鳴らしたとゆうような調子がな

く、讀經わ三十分ちかくかゝつておわつた。玉木わ頸から例の頭陀袋おはずしながら、いぶかしげにその方を見ている敬一お顧みて、

『これわ親父の遺愛の品でしてね。親父わ晩年どうした動機からか觀世音の信仰お得られて、これおかけてわ、よく熱心に觀音經お讀み讀みしていましたよ。何でも××寺の××大僧正からおくられたのだとか聞いてました。』

事業家肌合の玉木に、こうまでに、亡父の遺愛の品お親しみ、身につけて朝な朝な勤行するとゆうようなしんみりした情味があろうとわ、さすがに敬一も思いもうけぬことであつた。

朝食のテーブルにわ生みたての卵がつけられた。敬一わ、この場合、何かこう勿體ない氣がして、割つてたべようとする心になれなかつた。

『どうぞ卵おあがつて見てください。子供等にわ毎日のますようにしています。……… この頃わ、可なり遠方からも種卵の註文がありまして、食用のお客さんにわ、そう澤山まわせないのです。』

『それわ結構ですね。……… どうです、しかし、卵お仕切る時など、商賣人相手でわ、いやなことがありわしませんか。』

『それわ始終ぶつかりますが、以前そうゆう方でわ、幾分經驗おなめてるもんですから、どうにかやつて行けます。』

『商賣じみたことになると、どうも私わ、とんと、いけません。身構えがすぎたり、時々わまた餘りにお人善しに流れたりして、まごゝろとまごゝろとお通わすとゆうようなことに、なかなかなら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ないので、こまつてしまいます。そうゆうことにふれる資格が、私にわないらしいです。』
『あまり、つきつめて考えられるからでわありませんか。』
『いや、そうではないでしよう。……少しふんごんでかゝれば、どうかすると、一進も二進もつかぬはめに陷りそうなので、意氣地なしの話ですが、商賣がかつたことにわ、ふれたかない氣が、この頃、殊にしてきたのです。』
『あなたにそんなになられてしまつてわ、しようがありませんね。これからもつと〳〵積極的に出ていたゞかなくてわ……』
『商賣の仕方はじめ、財物の扱え方が、とゝのえば、ほんとうにいゝんだと思いますがね。出來さえすれば、是非、私もその役目おさせてもらいたいとわ願つています。これわ、勞働問題とも直接ひゞくわけですが、既成宗教が大抵回避的態度おとつているところお見ると、みんな苦心するにわしても、あまりわずらわしいので堪えきれないのでわないでしようか。天理教の現狀のように、菩提心と一所に精々財物おさゝげさせて、あんなにためても、さゝげる方わ、まあいゝとして、預る方が無反省で私財のようにつゝしみなく扱うのでわ、生活問題おとく權威など、もとよりありようはずがありません。教祖が婦人だつただけに、やゝこしい財の扱え方までわ、よく範お垂れなさらなかつたように思われますが。』
『或わそうだつたのかも知れません。………まあ、出來ても出來なくても、吾々わ是非そこまで手お垂れなくてわ。』

『……金つて、ほんとうに、魔物だと思いますよ。あれにふれると、人の心が丸つきり別になつてしまうから、不思議ですね。どうも扱えにくい……』

『ほんとうですね。』

二人わこうして食事中も熱心に語りあつたが、敬一の財物に對する態度が以前にくらべて大分消極的になつてきているのが何故であるか、玉木にわげしかねるとゆうふうであつた。

食事がすむと、玉木わ机の上から帳簿を一冊とつてきて、あるページおひろげて敬一に示した。

『これが私達の一年間の生活費の調べです。』

そこにわ、次ぎのような數字が讀まれた。

『緑の家』生活費　大正十三年九月より大正十四年八月まで

食費	四一六・二八円
被服費	二七・九〇
燈火費	九・六〇
燃料費	三七・五〇
衞生醫療費	一八・八〇
消耗品費	一四・四〇
通信交通費	四二・七〇
子供學用品費	一・四七

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

圖書費	三四・二一
什器費	一〇八・八七
修繕費	三二・五〇
地代	一九・〇五
雜費	一九一・九五
臨時費	一八・八〇
計	九七四・〇三
一ヶ月平均生活費	円 八一・一七
家族人員	人 六・四一
一人一ヶ月當り	円 一二・六六

『ふうん……そうですか、一人の生活費が月に十二圓あまりなんですね。』
敬一わ感に堪えないものゝ如く、こういつて、しばらくわ目お帳簿面からはなさなかつた。
『こゝわ時候もよし、勞働もそう骨の折れるわけでわなし、大體屋外生活になつているせいか、こんな生活のしぶりおしていても、みんな前とわ見ちがえるくらい丈夫ですよ。野菜類わうちの畑でも出來れば、方々からもいたゞきますし、これで、わりにゆたかなのです。』
『よく、みなさん、やりなさいますな。……働く時間わ。』
『何しろ生きもの相手ですから、こちらの都合で、休みおとるとゆうようなことわ出來ません。毎

日、降つても照つても、朝わ、この頃ですと、四時にわもう起きて、夜わ十時までわかゝります。尤も、その間中、小休みなく働いているとゆうわけでわありませんが。』

『それで何羽の鷄お御世話なさるんです。』

『今、産卵鷄が六百羽と、雛が五百羽ばかりおります。』

敬一わ、それからなお飼養法や事業經營の内容等についていろ〳〵たずねたが、住居にあてゝいる二十坪と鷄舍につかつている百六十二坪の地代が年に坪當り十五錢で、畑にしてある五百三十五坪の地代がその五分の一の三錢にしかついてないときいて、東京の方で彼の世話している託兒所の分園お、こうゆう惠まれたところに建設して、あのじめ〳〵した特有のにおいのする、晝間でも部屋の奥の方にいる人の顏わ、のぞきこむようにしてさえ、外の明るい光線になれた目でわ、よく見わけがつかないような細民窟の病弱兒達お、たとえ不時候の時だけせめて一週間ずつでも交代に轉住させることが出來れば、どんなにいゝだろうなどと考えた。

時計わもう十時おまわつていた。敬一わ正午までにわどうしても〇驛お立つていなければならないので、もうそろ〳〵暇おつげねばならなかつた。それでもこゝまできたほどだから、せめて有名な×松だけわ見て行くがよいと、しきりに玉木がすゝめるので、案内してもらうことにした。

鷄舍の方で働いている芳子夫人達に挨拶して、敬一わ玉木につれらて『綠の家』お出た。五六町いつて路が二筋に分れている所で、敬一わ、ふと、『綠の家』おふりかえつて見た。もうまばらに穗お出しかけている麥畑おへだてゝ、こいクレオソートぬりの下見板に、エスペラントで LA VERDA

DOMETO（『緑の家』とゆう意）とくつきり白くぬいてあるのが敬一の目おひいた。

『今朝わ、あの文字にわ、方角の關係か、氣がつきませんでした。』

『あれですか、あれわ私の發意でしたのでわないのです。あの建物おぬつたペンキ屋さんが、私達の生活のどこかしらに共鳴したものと見えて、仕事おしているうちに、商賣ばなれした氣持お持つようになつて、あんなに家不相應叮嚀な仕事おしてくれたのです。仕事しまいに、こゝの家の名が氣にいつたから屋根に書くといゝますから、屋根でもあんまりだと思つて、あすこにあゝ書いてもらいました。』

『そうでしたか。』

『それからすかつり懇意になつて、時々やつてきます。職人によくある思いきり直情徑行なたちでして、酒でおり〳〵しくじると見えて、そうしちや一々私のところまでわびに來るのですよ。』

『おもしろいですね。』

『この頃わ、そのおかみさんともちかしくしていますが、御亭主が私達とつきあうようになつてから、大へんかわつたといつて喜んでくれてます。時々、家内わ、そうしたおかみさん方に髮などゆつてやつてるようです。』

『そう〳〵奥さんわ髮がお上手なんでしたね。いゝ功徳お蒔いていてくださいます。………』

こんなことお話しながら、彼等わいつかM神社の前まできていた。玉木について敬一も參拜した。

神社わ敬一の想像したよりはるかに壯麗でないことが、反つて彼にわ心うれしく感じた。

やがて、彼等わ、社前からずうつと松並木の両側につずいた小路の方え足おすゝめた。正午ちかい春の薄日が、暗緑においた茂つた松の葉おもれてさしてくるのお、心もち仰ぐようにして、敬一わ深い呼吸おしながら、この一瞬一瞬お愛しむもののように、玉木よりやゝおくれがちに歩いた。こうして深い呼吸一つすれば、その一呼吸ごとに大自然の靈氣が、自分の體内にしみとおつて、邪なものけがれたものすべてお退散せしめる——こう、敬一にわ、眞實、感ぜられた。それほどに、彼がつい一晩前まで起居し續けていたところわ、震災で土が焼けてるので、幾度植えかえても立樹のもたない、こげた丸太や焼トタンでほんの間に合わせにこしらえられたバラックが、まだ所々に殘つていて、朝になつても雀のさえずりさえきかれないT市でも代表的なある細民集團地區に隣していた。

『勿體なすぎる。』こう思うと敬一の足わいよ〳〵はかどらなかつた。玉木わ、それお、下が砂地であるために歩きにくいとでも察したのか、

『もうじきですよ、あの小高い砂山の向うが海になつていて、その濱邊ちかいところに、はいているのですから。』と、ふりかえりざまにいつた。

『はあ、ありがとう。』

敬一わ、好意お謝するに堪えないとゆうおもゝちで、ほゝえみながらこう答えて、足お小刻みに急ぎだしたが、××松などわ、もう、どうでもよかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

未明の先驅者（六）

水上鐵治郎譯

者二名、即ちエヴアラードとウインスタレーとは、時の權威たりしフエアフアックス及びクロンウエンの面前に於て『その目的を宣言』せざるを得なかつた。

彼等の主張するところによれば、苟しくも勞苦に服するものはその勞働の成果を獲得しなければならぬ、衣なきものに衣を與へ、饑えたるものには食を與へ、且民衆の自由はあくまで尊重しなければならないといふのであつた。尙ほ彼等は、何人に對しても暴力に訴ふることをせざるばかりか、武器を帶ぶることさへも拒絕するのであつて、合法の權威者に對してはあくまで服從をしたのであつた。

七『水平運動』

不安動搖を極めた十七世紀のイギリスに於ける種々なる社會運動中最も著しいものは、『水平運動』であつた。

以前軍人たりしエヴアラードと稱するものを首領として、サレーのコップハムにそれが最初現はれたときは、約三十人程の團體であつて、今日勞働運動に於て主張されて居る如き主義を奉じ、之を宣傳したのであつた。

當時の『水平運動者』を以て國賊なりと見做した人々は、『水平運動』の目的を革命にありとなしたのであつた。それが爲め、運動の指導

フアフアックス將軍の面前に於て脱帽しなかつたことを咎められたとき、『あの人とて同胞にすぎないではないか』と答へたのは、彼等であつた。

クロンウエルがアイルランド征討の準備として切りに軍兵を募つて居つた一六四九年四月二十六日、木曜の夜、ビショップスゲートの兵士間に一大叛亂を企つるものがあつた。叛亂者は、ロンドンを去ることを斷乎として拒んだのであつた。之こそ實に水平運動の結果に外ならなかつた。

之を聞いたクロンウエルは、直ちに現場に走せつけ、例によつて一刀兩斷的に叛亂を鎭壓し、十五名を軍法會議に附し、内五名に對しては死刑の宣告が下されるに至つた。

しかし事實死刑に處せられたのは、一名にすぎなかつた。卽ち騎兵隊に屬してゐたロッカイヤーが、死刑を執行されたのは、當時騎兵練兵場にあてられて居つたセント・ポールの墓地であつたが、その死を悼んで葬儀に列した人々は五千人に達したと云はれて居る。一方叛亂は各地の軍隊間に勃發して、オックスフォードシアも、グロースターシアも、サリスベリーの本營も動搖するに至つた。

クロンウエルは、時を移さず各街道を占領して、愈々バーフォードに於て叛軍と戰ひを交へたのであつた。

軍法會議は又もや叛亂者を處罰した。トムソンと稱する大尉一名、伍長二名は、その結果、從容として武人の名を辱めざる死に就いたのであつた。

斯くして武人の一蹴の下に『水平運動』は粉粹するに至つたが、生きては社會運動の最高至純の理想に血を湧かせ、死するもその信念に徹動だも與へざりし彼等こそ、實に勞働運動の先驅者として永遠に記憶さるべきであらう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

鹿ヶ谷より

◇筧の水を斷たれて、谷川から桶で水をかつぎあげるなどの騷ぎで、典座さんはお骨折でしたが、夜分だけ、お隣の靈鑑寺さんの水を割愛して頂けることになつてホツト一息です。◇當番さんは、靜乃さんのお里からのお招で二週間程の豫定で二十八日(五月)出發。八田さんは天香さんの先發で急に福岡の方へ十七日(五月)お立ちになり、入れ違ひに弟さんの危篤のお知らせで御心痛のこと〻思ひます。遙かに御平癒の程を。貞安さんは長い間園の方で御苦勞下さいましたが、此度塾の方で簿記や英語のお手習を始めて下さいます。朝山さんは内島北朗さんのお宅へ燒物の繪かきや土練りから釜入れなどのお手傳に餘念がなく、夏井さんは引續き足立先生のお手傳に、野田清一さんは二十日(五月)にお國の方へ檢査にお歸りになり、旅のお疲れなどで暫らく國で御加養とのこと。飯塚さんも此頃では大分お元氣になられ、飯田さんもお風邪からお休みですが、もう熱もあまりございません樣子です。法貴さんは二十三日(五月)に長岡からお歸りになり、野木典郎さんは二年半ぶりで御歸園されて毎日托鉢においそしみです。佐々木秀見さん家政高女の小使さん代りに、高さん電氣局へ、上村さんお元氣です。◇郁子ちやん不相變園のうろほいです。聖學さんは三歲の朝鮮の子さんですが言葉は通じないでも子供の世界にたのしく遊んでゐます。榮子さんはおばあさんや郁子ちやんのお世話をかれて園の御手傳。中川、堀内、吉田、稻岡、牧島の皆樣元氣に御精進、島田さんも大分里心が出なくなつたと先日叔父さんからのお話し。岡本さん松本さんはお宅からの御催促で思案中。桐村さんもその組。秀子さんはお身重で何かにつけて不馴のため御不自由でせう。金澤さん燈影塾の方へ。◇新入園者、松田千秋、監原七三郎、月輪孝雄、西田保、小野木周吉、鄭スエ、中安さくの諸兄姉。◇暫らく在園の方、樋渡健兒、飯塚茂信、芝貞太郎の諸兄姉。(一燈園だより十一號から)

○お願ひ　皆さんの生活記錄、一燈園に對する希望など御投稿の榮にあずかりとうございます。どうぞ。

送り先　東京、本所、林町二ノ七八

同勞會　松　下　吉　衛

クリスト教社會主義史

松下吉衞著

代價卅二錢（郵税共）

著者より——◇社會改革後に於ける謂ふ所の眞の人類史の第一頁も、もし各人の生活に靈的體驗の光耀がないなら、睛を點せざる畵龍と選ぶ所なからう。自己の生活が、今、檢討の對象たる資本主義制存續の因をなす事なきやを深く省察せんとせず、たゞ口頭に組織惡を論難攻擊して能事了れりとする社會運動家に吾等は與することが出來ない。◇現實の生活を離れて信仰なく、時代の苦惱に對する具體的解決策を度外視しての祈禱も奉仕も、閑人の骨董いぢりを去ること餘り遠くはあるまい。不勞所得に食んで死屍取扱人たるに甘んじ、日常生活資料の淨不淨すら點檢せんとせずして、徒らに本來不可說なる神を教壇に演述して憚ぢない宗教家は、僞りの尊嚴の外、何者なるか。◇或は右傾といひ、或は左傾といひ、又或は對內的には少しく左傾にして對外的には少しく右傾にといふ。いふものをしてその欲するがまゝにいはしめよ。それ〴〵の見地に立つとき、すべて不可なからむか。たゞ、要は、よくそれが人性を明察し又社會組織進化の理法を正解し、あくまで生活の現實に卽した運動なるにある。◇かくてクリスト教社會主義者の歩みし道は、吾等に意味深い暗示であらねばならぬ。

購讀申込所

東京市小石川區小日向臺町　文化學會出版部　振替東京七二八〇

京都市烏丸頭小山下總町　回光社　振替大阪五九八三九

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

近代文化と一燈園

西田天香著　（代價三十錢）

内容――「お光り任せ」は消極でない、失業問題と一燈園、燈影小塾について、心の屑籠、外人の觀たる一燈園生活

一燈園生活問答

松下吉衞著　（代價十五錢）

内容――きわめて平易な問答體で、一燈園生活の眞生命、修行ぶり、在園者の日常生活、諸宗教との關係、進化論觀、社會運動觀等お述べたもの。附錄、道場淸規

購讀申込所

京都市烏丸頭下總町　回光社
振替大阪五九八三九、東京五七六七一

東京市小石川區小日向臺町　文化學會
振替東京七二八〇

一燈園經要

御希望の方わ實費・送料廿二錢（二錢切手）左記えお送りください。

東京市本所區林町二ノ七八　同勞會

●本誌創刊號第二號

目下再版準備中につき御希望の方わ此際回光社宛御申込くださいまし。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

世界文豪代表作全集

豫約募集

如何に文藝の門外漢でも——これ丈けは讀んで居なければ恥！

◆

内容見本 申越次第 進呈

ホーマー代表作（第一巻）
ダンテ代表作（第二、三巻）
沙翁代表作（第四巻）
ミルトン代表作（第五巻）
ゲーテ代表作（第六、七巻）
ユーゴー代表作（第八、九、十巻）
ツルゲネフ代表作（第十一巻）
イプセン代表作（第十二巻）
ドストエフスキ代表作（第十三、四巻）
ゾラ代表作（第十五巻）
ストリンドベルヒ代表作（第十六巻）
トルストイ代表作（第十七巻）
メーテルリンク代表作（第十八巻）

裝幀極美 校訂嚴密　**第十八巻**　菊大判六百五十頁以上

特色

◆各全集の粋を集めたる全集中の全集！

◆飜譯は總て原本による模範的の名譯！

◆裝幀は最善を凝らしたる無比の美本！

〆切 **五月卅一日**

略規

▲第一回六月中旬配本引續毎月一冊宛▲會費毎月四圓五十錢一時拂七十六圓に割引▲申込金四圓五十錢（最終月會費に充當す）▲豫約會員にのみ頒つ

顧問

内田魯庵　中村吉藏　昇曙夢　吉江喬松　本間久雄

飜譯者

内田魯庵　昇曙夢　中村吉藏　高原延雄　中山昌樹　中島清　宮原晃一郎　山内封介　井上勇　中村白葉　水野亮　木内打魚　布施延雄

◇装幀　柳瀬正夢

◆

苟も文化人たる體面上——これ丈けは備へて置かなければ恥！

東京小石川小日向臺町二ノ一九　世界文豪代表作全集刊行會　振替東京三六五八九番　電話小石川七九一七番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN